

## 安心の設計

介護、医療、子育て、老後に関するご意見・疑問をお寄せ下さい  
メールansin@yomiuri.com  
ファクス03・3217・9957

# 動物ロボに入所者笑顔



「療太郎」に話しかけたり、なでたりして笑顔を見せる利用者ら（7日、青嵐荘療護園で）

障害者の暮らしを支える入所施設で、利用者の生活の質を高めようと、ロボットやICT（情報通信技術）を活用する動きが広がりつつある。どのように利用できるのか、先行して取り組む障害者支援施設に取材した。

（阿部明霞）

「療ちゃん、かわいいねえ」。茨城県古河市にある障害者支援施設「青嵐荘療護園」。利用者の男性（78）が抱きかかえて話しかけている相手は、アザラシ型のロボット「パロ」だ。センサーや人工知能を搭載しており、呼びかけに反応して体を動かしたり、鳴いたりする。利用者らで相談して「療太郎」と名付けた、施設

## 障害者施設 弾む会話

の一人のような存在だ。男性は、交通事故がきっかけで16年前に入所。施設で暮らすストレスからか、職員とのやりとりなどではきつい口調になることも多かったが、療太郎を抱くと表情が柔らかくなり、笑顔も増える。他の利用者とも穏やかに話せるという。

サービスマン管理責任者の塚田由美さんは「みんな療太郎のことが大好き。『アザラシの住んでいる所は？』『何を食べるの？』といった話題で利用者や職員の会話が弾むなど、様々な場面で活躍している」と話す。

◇

### 促進へ国が補助金

ロボットやセンサーなどの技術は、これまで、高齢者介護の現場で先行して実用化されてきた。同様に施設職員の負担軽減が課題になっている障害福祉分野でも応用が可能なのが多いとみられるが、費用面が壁となり、介護分野と比べ導入が進んでいないという。

このため、国は2019年度に、障害者福祉施設向けの補助金を新設。利用者をベッドから車いすへ移す際の職員の負担を軽減するパワーアシストスーツなど、初年度は、障害者が生活する約150の入所施設やグループホームに機器が導入された。

今年度は補正予算と合わせて約1億5000万円を確保し、機器1台あたり30万円を上限に導入費用を支援している。

アバターロボットを使った実証実験の様子（足柄療護園提供）

### ICT活用 遠隔操作で面会、ライブ中継



コロナ禍で単調になりがちな施設での生活で、外部とつながるロボットを活用する取り組みもある。神奈川県南足柄市の障害者支援施設「足柄療護園」は6～7月、遠隔操作できるアバター（分身）ロボット「ニューミー」を使った県の実証実験に参加した。

まず、利用者の女性（29）と母親のオンライン面会に活用した。ニューミーは、細長い支柱の上部にタブレット端末

が付く形のロボット。タブレット端末の画面に、別室で操作する母親の表情が映し出され、「久しぶり」「元気だった？」などと会話をした。タイヤで自由に動かせる機能もあり、ホールで鬼ごっこもした。同施設では新型コロナウイルスによる感染症の拡大を受けて、外出や家族の面会、ボランティアの受け入れなどを制限。利用者が接するのは施設の職員だけという日々が続く中で、可能性を探る実験だった。

ニューミーは、折りたたんで手軽に持ち運べる。この利点を生かし、県内のライブハウスに「分身」として派遣。利用者が事前に希望していた曲などの演奏を、通信回線をつなげた同施設に届けてもらった。バンドのメンバーが「誰がリクエストしてくれたの？」とニューミーを介して呼びかけるなど、利用者はその場にいる気分を味わった。

同施設を運営する社会福祉法人「県西福祉会」の柴田和生事務局長は「コロナ禍でなくとも、家族が遠方に住んでいて頻りに面会できなかったり、障害で外出や移動自体が難しくなったりする人もいます。使い次第で、利用者の生活の質が向上する可能性を感じた」と話している。